

Title	経済学会報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.10 (1953. 10) ,p.881(125)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531001-0125">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531001-0125</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が決定される譯である。

最後に第三章で展開されている獨占的生産物に對する生産計畫を簡単に紹介しておく。

獨占企業に於いては今迄述べた競争的企業の場合の制約の他に更にもう一つの制限が加わる。彼の産出量の増加に伴つて價格が下落するであろう。之は産出量に對する需要の飽和現象を意味している。需要曲線下落の存在は、獨占者をして技術的に可能な制限より以下に彼の生産物を制限せしむるであろう。その場合の接近方法は以前と大部異なる。

多數商品を結合的に生産する一つの企業を考える。企業は幾つかの生産工程 $P_i$ を有し、 $P_i$ の各々はその生産工程で費された一弗あたりの生産物の各々 $y_i$ に依つて特性づけられるものとする。更にその生産物の市場に出される價格がその數量に依存する——簡單の爲一次函数であると假定すると、企業は生産の爲の直接費用を超過する粗収入の超過分を極大にしようと試みるであろう。 $P_i$ に依り $i$ 番目商品の價格、 $y_i$ をその産出量、 $b_j$ と $c_j$ をその商品の需要曲線を記述する固定係數とすると

$$p_i = b_i - c_i y_i$$

なる式が成立つ。前の場合と同様にその工程で一弗だけの消費がもたらす種々の産出量に依つてその工程は特性づけられる。その時は $i$ 工程の支出額を示し、企業が $n$ ヶの工程を持つものとすれば、その生産状態は次式で表わされる。

$$\begin{pmatrix} y_1 \\ y_2 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & \dots & a_{1n} \\ a_{21} & a_{22} & \dots & a_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{n1} & a_{n2} & \dots & a_{nn} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix}$$

$$\therefore Y = AX$$

更に價格關係は次式で示されよう。

$$\begin{pmatrix} p_1 \\ p_2 \\ \vdots \\ p_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} b_1 - c_1 y_1 \\ b_2 - c_2 y_2 \\ \vdots \\ b_n - c_n y_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ \vdots \\ b_n \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} c_{10} & c_{11} & \dots & c_{1n} \\ c_{20} & c_{21} & \dots & c_{2n} \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ c_{n0} & c_{n1} & \dots & c_{nn} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} y_1 \\ y_2 \\ \vdots \\ y_n \end{pmatrix}$$

$$\therefore P = B - CY$$

さて販賣からの粗収入を $g$ で表わせば

$$g = Y'P$$

$$r = Y'P - IX$$

となり、故に粗収益は次式で定義される。

この $r$ が最大になる様に最適計畫を設定するのである。ドルフマンはこの考え方を更に獨占需要(monopsony)の場合に迄適用している。何れも、獨占供給の場合には生産要求需要價格を、獨占需要の場合には生産物價格を、以前と同様に陰伏的に導入している事に變りはない。従つて前述の批判はこの場合にも適用されるであろう。

#### 四 結 語

以上でドルフマンの理論の大部分を批判しつつ概括し終え

た。彼が冒頭で述べている通り本書は「線型計畫論の企業理論への適用の最初の試みである。」且つ價格體系との結合を獨自の方法で線型計畫に結合し、競争的企業から獨占的企業の場合に至る迄體系的な展開を爲している。更に本稿では觸れ得なかつた數理的側面に於いても嚴密な理論を構成し何等の批判を加うべき餘地を残していない。企業理論の線型計畫論からの接近に於ける一分野を開拓したものと云えるであらう。しかし乍ら、既に述べて来た如くドルフマン理論の適用範圍に於ける新投資決定理論の缺如、保有の固定要素のみで生産工程を特性づける不完全性——即ち變化要素との組合せに依る使用強度の無視等を考慮する時はやはり技術的な關係を示す生産函数を導入し、その生産函数に線型計畫を適用すると共に市場價格體系の陽表的な導入に依つて企業均衡點を見出す方法が必要となつて来るのではなからうかと考えられるのである。

#### 經濟學會報告 (昭和二十八年四月—九月)

四月十六日	我國における勞務管理の發達と特質	森 五郎
四月三十日	「プロコピウス」アネクドット「ウエーバー」方法論における自然主義批判の問題	宇尾野 久 服部成三郎
五月七日	生産における一假設について——配率の新投資需要などについての考察	小尾惠一郎
五月十四日	M・ウエーバーの没價值性理論に於ける主觀性(客觀性)について	富田重夫
五月廿一日	貸借對照表上の純利益	高橋吉之助
五月廿八日	臨時工の實態とその特質	黒川俊雄
六月四日	近世における漁業經營の一形態	速水 融
六月十一日	「リチャード・ジョーズ」のリアカア下地代論批判	平野絢子
六月十八日	アメリカ植民地工業の發展	中村勝己
六月廿五日	植民地の獨立と新植民政策の展開について——インドネシアの場合——	矢内原 勝
七月九日	資本需要理論の分析——投資函数の測定	尾崎 巖
九月十七日	フランス産業資本家の性格について	渡邊國廣